

スクールソーシャルワーカーの語りで見られた実践上の困難

一人職場の孤立を避けるために

○ 同志社大学大学院 氏名 洪 承載 (009857)

キーワード：スクールソーシャルワーカー・困難・インタビュー調査

1. 研究目的

児童生徒及び家庭が抱えている困難の深刻化，学校の相談体制強化の必要性といった社会的背景のなかで，文部科学省は2008年に「スクールソーシャルワーカー活用事業」を開始し，スクールソーシャルワーカー（以下，SSWer と記す）を全国141箇所配置する全額補助事業で全国展開した。SSWerは，社会福祉等の専門的な知識・技術を基盤として，児童生徒の環境的要因に対する働きかけ，学校の教職員及び地域の関係機関との連携・協働を担っていた。また，近年になると，子どもの貧困やヤングケアラーといった既存の制度では対応が難しい複合的課題を抱えている児童生徒及び家庭の環境的要因に働きかけるSSWerの実践が一層重要になったと考えられる。

しかし，総務省行政評価局（2020:26-29）「学校における専門スタッフ等の活用に関する調査」ではSSWerの知名度や活動実績の低さ及びSSWerの役割に対する学校の理解不足など，SSWerの実践に関する課題が指摘されている。つまり，児童生徒及び家庭の環境的要因に働きかけるSSWerの役割が一層重要になっているものの，SSWer実践の展開から見えてくる課題も多数存在している。また，このような課題を抱えているSSWerが実践を行う上で何らかの困難を抱えていることが予想される。そこで，本研究は，SSWerを対象とするインタビュー調査により，SSWerが実践を展開するうえで，抱えている困難はいかなるものかについて幅広く質的データを収集する。そして，それらの結果を，照らし合わせ，SSWerが実践上の困難を乗り越えるために求められている点について示唆を得ることを目的とする。

2. 研究の視点および方法

一方，SSWerの実践課題を明らかにする研究の広がりを見せているが，SSWerが実践を行うなかで抱えている困難およびその対処に関して焦点を当てた研究は希少である。SSWerが抱えている実践上の困難に焦点を当てることは，SSWerがより円滑に児童生徒及び家庭の環境的要因に働きかけするうえで重要であり，SSWerという専門職を学校や家庭への理解促進に取り組むことうえで欠かせないと考えられる。そこで，本研究における研究方法は，現在働いているSSWer計10名を対象としてインタビュー調査を行い，語りの中で見られた実践上の困難について焦点を当てた。

3. 倫理的配慮

本研究における調査は，同志社大学「『人を対象とする研究』に関する倫理審査委員会」の承認を得て実施した（承認番号：22009号）。調査対象者には，事前に「研究に参加される

方への説明書」と「研究参加への同意書」を郵送し、文書および口頭により、研究の趣旨や調査にかかる倫理的配慮事項について説明し書面にて同意を得た。得られた情報に関しては、あらかじめ情報提供者の同意を得た上でデータを収集した。調査の結果の公表に関しても、調査対象者に承諾を得た。また、個人情報保護のため、得られたデータを匿名化し個人が特定できないようにした。なお、本発表に関連して、開示すべきCOIはない。

4. 研究結果

インタビュー調査の結果、『学校のなかでSSWerが抱えている困難』、『SSWer個人が抱える困難』、『SSWerの実践における構造的限界』、『SSWerの実践を支えるための制度的整備』という4つのカテゴリに整理された。まず、『学校のなかでSSWerが抱えている困難』では、SSWerが抱えている実践上の困難は、主に教職員との関わりや学校という組織のなかでSSWer個人が抱える困難が主であった。また、『SSWer個人が抱える困難』では、一人職場の難しさが語られた。そのうえ『SSWerの実践における構造的限界』では、学校によって異なるSSWerの位置づけが指摘され、教職員との連携・協働が困難であることが見出された。さらに、『SSWerの実践を支えるための制度的整備』としては、SSWerとして続けて実践を行いたいという思いを制度的に支えていく必要性が見られた。

5. 考察

調査対象者であるSSWerの語りによると、SSWerの仕事は自由度が高く、児童生徒及び家庭に必要であると思う実践を行うといったクリエイティブな点が強みである反面、一人で孤立する傾向があり、抱え込むことが多いという。つまり、SSWerが実践を行うなかで、一人職場の難しさを感じていることが明らかになった。ただ、こうした一人職場の孤立を一度に解決できる制度があるわけではなく、他方で、SSWerがもっと頑張ればよいという問題ではない。なぜなら、SSWerが実践を展開するうえで抱えている困難は、様々な要因がダイナミックに関わっているため、一つの要因を切り取るだけでは、SSWerの実践上の困難を解決することは難しいからである。

確かに、これまで一人職場の難しさに対処するために、スーパーバイザー、勉強会や研修会といった制度が設けられている。しかし、インタビュー調査を行ったSSWerの話によると、SSWer同士の話し合いができることを望んでいる一方で、業務の量が多く、個人が学校を超えて、SSWer同士の繋がりを作ることが難しいことが指摘された。また、SSWerを継続していきたいという思いがある一方で、勤務年数の長いSSWerに対するフォロー体制が不十分であり、勤務年数や実情に応じた研修が設定されていないという。そこで、一人職場の孤立を避けるためには、SSWerが継続して働けるように支えるための体制構築が求められるのではないか。

参考文献

総務省行政評価局（2020）「学校における専門スタッフ等の活用に関する調査」

(https://www.soumu.go.jp/main_content/000687333.pdf, 2024.5.22).